

グラントにおける事物化されないものとしての自然 ——思弁的实在論を論じる前に

菅原 潤

はじめに

思弁的实在論の有力な論者の一人であるイアン・ハミルトン・グラントについては、以前シンポジウムで研究発表する機会があった¹。その際は準備不足で主としてシェリングの『ティマイオス』解釈をめぐる議論の報告にとどまったくらいがあったが、その後主著『シェリング以後の自然哲学』（以下『以後』と略記）を読了するにおよんで、思弁的实在論者のなかでのグラントのユニークな位置づけを知ることができた。当日のシンポジウムでパネラーの清水高志氏がメイヤサーを介してシェリングとドゥルーズを強い相関主義者として規定したが、これに対するリスポンスを兼ねた議論をしていきたいと思う²。

ちなみに清水氏がシェリングとドゥルーズに緊密な関係があると見立てたことには、何の違和感もない。なぜなら後述するようにグラントは主著の後半で火山論を介してシェリングとドゥルーズの関係を濃密に展開しているからであり、そこにはシェリングの自然哲学を理解するための大きなヒントが含まれているからである。そこでポイントになるのが、論題にある「事物化されない」である。これはグラントの言う‘unthinged’を訳したもので、若きシェリングが‘Unbedingte’を「物にならないもの」という意味づけをしたことにのっとったものである。シェリングの『自然哲学体系の序説』には‘unbedingte Objekt’というある種意味不明な語が出てくるが、これにグラントの言う‘unthinged’という意味合いを結びつけると、決して物のかたちをなさない、まさしく「事物化されない」自然とでも言うしかない姿が捉えられることになる。それゆえ唯物論とは一線を画した「事物化されない」自然を論じた者として、グラントを論じていきたい。

1. 世界的な自然学——プラトン『ティマイオス』からの受容

「事物化されない」と言う聞き慣れない語の意味合いについては後で検討することとし、まずはグラントの経歴について紹介しよう。グラントは現在西部イングランド大学の上級講師で、わが国でもおなじみのリオタールの『リビドー的経済』とボードリアールの『象徴的交換と死』の英訳者として知られているというわけだから、一般的に言えばフランス現代思想の研究者と見られるべきだろう³。

けれども本稿で取り上げる『以後』の中身を見ると、シェリングの最新の研究を完全に

カバーしており、またシェリングの弟子筋の自然哲学者も詳しくフォローしているのだから、本当に思弁的实在論の有力な論者であるかどうかの評価はさておき、少なくともlessnessとしたシェリング研究者と見なすべきだと思われる。なお『以後』の書名についてだが、書名を額面通り受け取るとシェリング以後の主要な自然哲学者、例えばフォイエルバッハやブロッホなどを扱っているように受け取られるが、実際にはシェリングとその周辺の自然哲学者たちを論じているので、和訳の際は『ポスト・カントの自然哲学』とでも書名を改めるべきだと考える⁴。

『以後』の中身を詳しく検討してゆこう。シェリングは1795年に『哲学の可能性としての形式について』という論文を発表することでデビューし、それから1800年にフィフテと決別するまで忠実なフィヒテ主義者と見なされていたというのが通説だが、実はデビュー論文の発表の前年にプラトンの『ティマイオス』に註釈をつける研究ノート、いわゆる『ティマイオス論』をシェリングが作成していたことに注意したい。『ティマイオス論』は20年ほど前に活字化され、わが国の一部の研究者には知られているのだが⁵、グラントはこれをことのほか重視し、基本的にはその後のシェリング哲学の方向性を決定づけたとすら見ている。

それでは、グラントにとってシェリングの『ティマイオス論』の核心は何か。グラントはこれを「一世界的な自然学」という、これまた聞き慣れない語を用いて特徴づけている。それによればプラトンの『ティマイオス』では、自然のうちにある種の理念が存在し、それがあある種の力の均衡を通じて生成してゆくというのである。

このシェリング＝グラントのプラトン解釈を聞くと、われわれは強い違和感を持たざるを得ない。なぜならわれわれが目にするプラトンの理念論、いわゆるイデア論というのは、事物の背後に目に見えないイデアが存在しそのイデアこそが真の实在であって、そうしたイデアからすればわれわれが目にする現象はイデアの影だとされるというものだからである。こうした見えないイデアと見える現象の分裂を表現する語として二世界論という言い方があり、その二世界論を前提として現象の世界を扱うのが自然学、イデアを扱うのがメタ自然学たる形而上学だというのが、通常のプラトン解釈である。しかしながらこのグラントの説明によると『ティマイオス』に限って言えばイデアたる理念は現象の側にあり、また現象の只中で議論が展開されるのだから、現象とイデアの分裂はなく、また分裂がないから自然学に踏み止まり、一世界的な自然学が提示されるというわけである。ここには形而上学というものが不要であることが含意されているように思われるが、これについてはグラントのアリストテレス解釈を見てゆく必要がある。

こうした『ティマイオス』の掲げる一世界的自然学を、グラントはカント的な二世界的自然学とも対立させる。そしてその淵源はアリストレスにあると見なされる。つまり『ティマイオス』では「一切の自然学」⁶が追求されるのに対し、アリストレスの『自然学』では「一切の事物の自然学」が求められており、そしてそこでは「一切の自然の事物に共通する究極的な基体」が探求されているからである。ここで「一切の」と「自然学」のあ

いだに「事物」が入るか入らないかで、自然学の性格づけは一変するとグラントは考える。

この事情について少し立ち入って考えてみよう。アリストテレスは『形而上学』において「存在としての存在の学」ないし第一哲学から「自然学ないし第二哲学」を分離するので、もはや形而上学と自然学が同じ「自然」を取り扱えなくなる。そうなると「宇宙は複数の隔てられた個々の存在者により構成される」ことになり、『生成消滅論』によれば「知覚可能な物体、つまりは触知可能な物体の原理」(329b7)の発見のみに自然学は興味を抱くものとされる。このように自然学の対象を「物体の教説のみ」に限定するというのはカントも同じであり、彼は『天体論』が掲げる「物体、等級、[これらを]所持する存在者、および事物の原因」規定を踏襲している。言うならば事物と基体の二本立てで自然を考察するというのがアリストテレス-カント的な二世界的自然学であり、これにプラトン-シェリング的な一世界的な自然学が対立するという図式となる。

それではその一世界的な自然学を貫く原理、物体を用いないで自然を説明する原理とはいかなるものなのだろうか。ここでグラントは、弟子のキールマイアーの論文に対するシェリングのコメントからアプローチしてゆく。ここでポイントとなる語が「反復発生」である。

2. 反復発生 of 非線型的使用

はじめに「反復発生」という、哲学の業界では聞き慣れない術語について説明しておこう。この語の原語は‘recapitulation’で、19世紀後半に活動したドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルの提唱した立場である。ヘッケルと言えば「個体発生は系統発生を繰り返す」というテーゼが有名である。ダーウィン研究の第一人者として名高い八杉竜一によると、その後の研究の進展により「個体発生は系統発生 of 完全な反復ではないが、個体発生過程にはしばしば系統発生 of 反映が見られること、とくに胚どうしの比較によってとらえられるということ」が確認され、この現象が‘recapitulation’とは別のいわゆる「反復」、‘repetition’と呼んで区別されるようになった。その際に八杉は「‘recapitulation’には単なる反復ではなく集約の意味があり、過去の全段階が現在に集約させている意味をふくむ」⁷としている。この点は重要である。繰り返しになるがヘッケルは19世紀後半の生物学者なので、直接シェリングとは接点はないが、後述するように、個体の発生がその個体の種の全体のイメージを含む意味合いを持たせるように、グラントがシェリング哲学を解釈する傾向が認められるからである。

こうした‘recapitulation’と‘repetition’の違いを念頭に置いたうえで、反復発生 of 線型的利用と非線型的利用について考えてみよう。グラントはシェリングの弟子の自然史家で比較解剖学者であるカール・フリードリヒ・キールマイアーの「一連の有機体を通じて of 有機的諸力同士の展開 (*Über die Verhältnisse der organischen Kräfte untereinander in der verschiedenen Organization: Die Gesetzte und Folgen dieser Verhältnisse*)」

(1793 年) からヒントを得た議論を、反復発生^{レピテリション}の線型的利用の例として捉える。それによると人類が生命概念の頂点とされる。ここで想定される自然はおおむね生命、すなわち有機的自然であり、しかもある種の連続性を通じて把握されている。ここに反復発生^{レピテリション}の線型的使用という含みが反映されているし、また有機的自然と無機的自然の断絶という捉え方には、先に見たアリストテレス-カント的な二世界的な自然学の発想が見てとれる。

他方でグラントは〈反復発生^{レピテリション}は有機的領域のみならず無機的領域においても、すなわち宇宙生成論から高等動物の生産にいたるまで作用する〉というキールマイアーの論点のうちに、今し方対立的に捉えられた無機的自然と有機的自然の対立を克服する視点を模索していると見る。こうした質的な違いをも非連続の連続として捉える見方をグラントは反復発生^{レピテリション}の非線型的使用と呼ぶわけだが、ここで重要なのは線型的使用において生命概念の頂点とされた人間の位置づけが大幅に後退し、これに代わって「反復発生^{レピテリション}の統一性」という視点が前面に出てきて、それが「力動的プロセス」と称されていることである。つまり反復発生^{レピテリション}の線型的使用では同じ有機的自然の連続性が強調され、そのなかの量的差異の行く先にある人間のいうならば「霊長類性」が強調されていたのだが、反復発生^{レピテリション}の非線型的使用では有機的自然と無機的自然の質的な差異に目を向けずに、むしろ双方にまたがり繰り返される「反復発生^{レピテリション}」の同一性が注目されて、その同一性がまさしく「力動的プロセス」として取り出され、独立的に論じられる視点が獲得されたということである。すると線型的利用で暗黙裡に前提された人類の自己意識的活動の意義よりも、そうした人類を含めたあらゆる自然の主体となる自己構築的な物質が重要な意味を持ち始める。ここで本発表のタイトルに掲げられた「事物化されない自然」が登場することになる。

3. 「事物化されていない自然」

「事物化されていない自然」について、グラントは次のようにまとめている。

なるほど「自然哲学」は、自然の最高の産物としての「人類」の形成に帰結するといふよりは、むしろ「物質を……無条件的な存在者として」、「一般的なものの実質」を「把握して」いるのであり、そしてその実質が力動的活動のうちで「新たな思考の器官を備えた新たな新種」を引き起こすとされる。この場合、シェリングによる反復発生^{レピテリション}の自然哲学的な処理が目指すものは、反復発生^{レピテリション}の統一性を注視する反復発生^{レピテリション}の概念の持続的な無条件化なのであり、そしてその無条件化は特定の身体に局在化するのではなく、原子、化合物、有機体、天体かどうかにかかわらず、それ自体が物質の自己構築の力動的なプロセスなのである。反復発生^{レピテリション}の無条件化は、反復発生^{レピテリション}の概念を自然主義的に還元した使用に関して、遠大な帰結をもたらすことになる。換言すれば、反復発生的な出来事の同定は、反復発生^{レピテリション}しつつあるものを最初に同定することに依存するということである⁸。

この引用文においてはまだ「事物化されていない」という文言は見られないが、その代わりに「無条件化」という語が出てくることに注意してもらいたい。シェリングにおいて「事物化されていない」と「事物化されていない」はほぼ同義である。冒頭でも若干触れたが、シェリングは第二論文『哲学の原理としての自我について』（1795年）において、一般的には「無制約者」と訳される‘Unbedingte’のなかに‘Ding’という語が隠れていることに着目して、これを「事物化されていない」という意味を持たせるようにしたが、他方で‘Unbedingte’を英訳すれば‘Unconditioned’、つまりは「無条件的」になるわけで、この二つは一致すると考えてよいことになる。

それでは、この「事物化されていない」という面に着目すると、自然はどのようなものとして捉えられるのだろうか。まず大事なのは、先ほどアリストテレスとの兼ね合いで述べたのとは異なり、自然はもはや知覚可能なものではなくなるということである。知覚可能なのはむしろ、この「事物化されていない」自然の産物であり、よく知られた言い方を用いれば‘natura naturata’（所産的自然）なのであって、これに対して「事物化されていない」自然の方は‘natura naturans’（能産的自然）、あるいはシェリングの用語を用いれば生産性ということになる。さらに「力動的プロセス」の側面を念頭に入れて、反復発生の線型的使用との対比を心がければ、例えば人類を生命概念の頂点と見るような、可視的な所産的自然の側から自然のプロセスを捉えるのではなく、むしろ形をなさない自然、あるいは形になったものを呑み込んでしまうような不気味な自然が「事物化されていない」自然において想定されることになる。したがって「事物化されていない」自然を成り立たせるものは力となり、またそうした自然の生産性と産物のあいだは非対称的なものとなる。つまりは形をなさない生産性としての自然の方が通常のもので、形をなす産物の方がむしろ力動的プロセスのうちで例外的なものとなる。こうした自然の特徴を、グラントは次のようにまとめている。

同じことは——「理念的」で存在論的な構築（構築と存在の同一性）であれ、あるいは「物質の自己構築」であれ——一切の構築に当てはまる。したがって理念的なものと同様に自然においても「自然はその一切の多様性のうちで、この X に対する無限な接近から立ち上がる」。接近が「無限」で自然が「多様」なのは、主体としての自然を成立させる絶対的産出性に適合する特殊な構築が——理念的であれ、自然科学的であれ——存在しないからである。こうして自然における特殊性の追求が導かれるのは「全体としての自然」でも「力動的」ないし物質的な原子論でもなく——確かに何らかの類の「事物」ではなく、「自然における事物化されないもの」ないし主体としての自然である。〔中略〕自然の主体は産出性と産物の同一性を定常的に反復することで成立する。産出性は産物から分離できない（産物なくして産出性はなく、また影響を与えない力とならないがゆえに、何ら力もない）から、また産出性は何らか

の産物ないし産物の全体性に還元できないから、同一性の非対称性は定常的な産出性を通してのみ維持される。したがって『序説』が言うように「産出性の産物は新たな産出性」であり、換言すれば主体としての自然はさまざまなレベルにおける自己の反復発生である⁹。

4. 「超越論的火山活動」——シェリングとドゥルーズの接点

こうして見ると、グラントがシェリング哲学に認めるところの「事物化されていない自然」には、一般にドイツ観念論として一括りにされるフィヒテとヘーゲルが言うところの客体の規定から大きく外れるところがある。フィヒテにとっての客体とは主体が定立されると直ちにそれに対立させられる非我であり、またヘーゲルにとっての客体は主体が自己内還帰する際の媒介だが、シェリングにとっての自然はむしろ産物を産み出してはそれを呑み込む力動的プロセスだから、通常とは違って客体ではなく、むしろ主体の側にあると思えるし、またどちらかと言えば客体と見なされるべき産物も、フィヒテやヘーゲルの客体に見られるような異質性や疎遠さを備えてはいない。『ティマイオス論』までさかのぼれば、フィヒテとヘーゲルの前提する客体はアリストテレス-カント的な知覚可能な物体だが、グラントがシェリングに認めるプラトンの自然学は、そのなかで生成消滅する自然のプロセスということになる。

そうなるとうしたグラントの言うシェリングの自然哲学に近いものは誰かという話になるが、そこでグラントは時代はぐっと下って現代のフランスの哲学者ドゥルーズの名を挙げる。この点は冒頭でメイヤスーが両者を強い相関主義者と規定していた経緯と関わってくるので、少し詳しく見ておこう。グラントによればドゥルーズがシェリングに積極的に言及するのは2回あり、そのうちの1回はフェリックス・ガタリとの共著『千のプラトー』の第3章であり、そこでドゥルーズとガタリは道徳の地質学なるものを展開する際に、シェリングと関わりのある生物学者キュヴィエなどが登場する進化論の論争を話題にする。こうしたシェリング的な地質学に対するドゥルーズの興味は、その主著である『差異と反復』でふたたび見受けられる。次の個所に注目しよう。

等質の延長のなかに現われるような地〔背景、基底〕は、「深い」もののひとつの投影である。この深いものだけが、〔シェリング的な〕ウングルント、すなわち無底と言われうる。図と地の法則が妥当して、ひとつの対象が中立的な地の上に、あるいは他の諸対象の地の上に際立つためには、その対象自体がまずはじめに、おのれ自身の〔根源的な〕深さとの関係を維持しているのでなければならないだろう。〔中略〕純粋な空間的諸総合が、ここでは、先に規定された時間的諸総合の繰り返しであるということに驚いてはなるまい。すなわち、一方では、延長の繰り返し広げは、習慣のあるいは現在の第一の総合に基づき、他方では、深さの巻き込み〔潜在〕は、《記憶》の

および過去の第二の総合に基づく、ということである。そればかりではない。深さのなかに、普遍的な「脱根拠化」を告げる第三の総合が接近し沸き立つのを予感しなければならない。深さとは、さながら北東から南西に走るあの有名な地質学的線のごときもの、すなわち、ものごとの核心から生まれて斜めに走るラインであり、沸き立つ感性を、「おのれの火口のなかで轟いている」思惟に結びつけるために、いくつもの火山を配置しているラインなのである。それをシェリングは、こんなふうに言うべきを心得ていた——深さは、外側から縦と横に付け加えられるのではなく、縦と横を創造する抗争という崇高な原理として、埋もれたままになっている¹⁰。

訳語はあまりこなれてないため、ごつごつした文体になっているが、それだけにこの箇所が明らかにシェリングを意識したものであることがはっきりと分かる。何よりも冒頭に出てくる「ウングルント」がその証左だが、もう一つ注意したいのが「脱根拠化」という文言である。原語を見るとこれは‘effondement’になるが、グラントが参照する英訳はこれに‘ungrounding’という訳語を当てている。これはもちろん先述の「ウングルント」につながる言葉であり、「無底化」とでも訳すべきだと思える。「無底」と言えばシェリングの主著である『自由論』のもっとも重要な概念だが、ここでドゥルーズは無底をよりによって火山活動と結びつけて論じてゆく。こうしたドゥルーズの提案を受けてグラントは、両者の思索の対象を「超越論的火山活動」と呼んで一括りにする。

特にカント哲学に精通している向きからすれば「超越論的火山活動」という言い方には相当の違和感があると思えるので、ここで少しドゥルーズの言い分を聞いておこう。先の引用ではシェリングが直接的に火山活動を話題にしていたかのように受け止められるが、その理解はいささか正確さを欠いている。グラントはシェリングの弟子でノルウェーの地質学者であるヘンリク・シュテフェンスの「地球の酸化と還元のプロセス (*Oxydations- und Deoxydations-Prozeß der Erde*)」(1800 年)における次のような記述に注目する。

おおよそ北緯 22 度から 23 度までに始まって南緯 15 度から 16 度までの地球を取り巻く火山帯を取り上げるならば (ほぼすべてが陸地である——自然学上の赤道が数学的赤道よりも北側に伸びていることは、あらゆる現象により示唆されるところである)、この火山帯に属さない一切の火山群は北半球から東半球までの地帯と、南半球から西半球にいたる地帯に存する¹¹。

こうしたシュテフェンスの問題提起を受けてシェリングは、『わが哲学体系のさらなる叙述』(1801 年)において次のようなコメントを寄せる。

絶対的緊密性と相関的緊密性という両軸のあいだの葛藤は、二方向の対角線の生産を決定する以外には、ほとんど終息できない。われわれは内在する三次元を勃発さ

せ解放する産出のプロセスに関して、既知のプロセスのあいだで類推することができない。〔中略〕この研究に関して私は、いっそうしっかりと直接的にシュテフェンスにより証明されたことを頼みにできる。すなわち〔中略〕北半球の一切の火山は東半球に、南半球の火山は西半球に停留していることである。この関係を表現するのに、われわれが提供した対角線、厚みにおける地球の両極性以外のものはあるのだろうか（IV、504-5）¹²。

つまりシュテフェンスにとってもシェリングにとっても問題となっているのは、地上の磁気の活動と地中深くの火山活動に何らかの相関関係があるという、すぐれて自然科学的な推測なのだが、ドゥルーズはそうした自然科学の試みのうちにある種の超越論的な次元を読み取っている。新進気鋭のドゥルーズ研究者である山森裕毅によれば、ドゥルーズはその最初の著書『経験論と主体性』以降、カントが超越論的な次元と経験的次元を峻別したことを批判し「経験からの超越論的なものの発生」¹³を問うのだから、シュテフェンス-シェリング的な自然科学に超越論的なものを読み取るというのは、ドゥルーズ自身からすればごく自然なことだと言える。

これに対してグラントがシェリング哲学のうちで強調するのは、先ほどの生産性の議論の延長で地球自体が生産性の産物であり、また同じ産物として超越論的なものと較べられるという見方である。したがって火山活動を考察する場合でもその基底となるのは「物質そのものの構成の根源的条件」（IV、76）であり、これにドゥルーズは先述の無底の次元と結びつける。今しがた述べたように、火山活動についての議論は『自由論』以前のもののなのでこうしたドゥルーズの解釈はミスリーディングではあるが、言うならば火山の噴火にともないこれまで足場となっていた地表が崩れ去り地割れが生じるという、ある意味で 3・11 以降なじまれるようになった経験を「無底」と読み替える視点を提供する点で、ドゥルーズは生産的な論点を提示したものとも言えるだろう。

このように自然哲学の枠内での火山論とドゥルーズを結びつけて論じるグラントの論調について、ポストモダンの影響の色濃いアンドリュー・ボウイは昨今の物理学の展開に耳を貸さないものと断定して「細部については非常に洞察力に富むものの、直ちに古ぼけてしまうものとの混同体である」¹⁴とこき下ろしている。けれども最近になってプラトンの『ティマイオス』に収められた、太古に沈んだとされるアトランティス伝説とマドレーヌ文化の親近性を論じた著書などが刊行されたことを考慮すれば¹⁵、グラントの議論は 19 世紀前後の自然哲学の文献学的研究に収まらない射程を有すると言えるだろう。

5. 事物化されていない自然と事物化された自然 ——唯物論との差異について

以上の議論を踏まえて、冒頭で掲げたシェリングとドゥルーズを相関主義者として一括りにするメイヤースーの『有限性の後で』の提言に立ち返ろう。すでに述べたようにシェリングが掲げているとグラントが考えているものは事物化されない主体としての自然であり、恐らくはメイヤースーが相関主義者において想定している主客関係はいずれも、この事物化されない自然の産物ということになるから、メイヤースーが考えている主客関係は少なくとも、グラントが捉えるシェリングには認められないことになる。そうしたシェリングとドゥルーズの接点についてグラントが論じているのだから、メイヤースーの目線のみでシェリングとドゥルーズの立場を決めつけるのはフェアな議論ではないと思われる。

もちろんこの書でメイヤースーはグラントの議論に論及していないので、この提言だけをもってメイヤースーがグラントに批判的だと結論付けることはできないから、思弁的实在論者のうちでグラントの『以後』を話題にしている論者につき従うというのがグラントを正しく理解するためのいい筋道だろう。そうした論者の一人であるグラハム・ハーマンは、思弁的实在論者の幾つかの論考を収めたあるアンソロジーにおいて、自らの立場がグラントに近いことを告白する。つまりグラントとハーマンは伝統的なプラトン主義的な实在性と理念の転倒を批判し、またこれらの一方から他方へと移行する道筋を否定する点で一致しているのであり、また同じくプラトン主義に反対するにしても数学をモデルとして議論をするバティウに反対する点でも、両者は一致するというのである。

バティウに対するグラントの態度については浅沼光樹氏の論考を参照してもらうこととし¹⁶、次のようにグラントとの不一致点を説明するハーマンの発言に注目しよう。

私が自然的な客体と同じくらい軍隊とプラスチックのカップを愛し、グラントが夕日とヒナゲシ畑に限定するというのが主要な論点ではない。グラントの問題は客体そのものにあり、そしてそれは私の立場の核心を形成するものである。つまりグラントは物体以前の力動主義を優先して、「物体主義」（ないし物体の哲学）と称するものに異を唱える。力動主義を自然哲学と同定するのは、精確さを期するには不十分である。〔中略〕この見方は哲学史についての異端的な見方につながるものである。それによればアリストテレスは個体的実体に注目することで観念論者に転じたため、彼はカントに味方し实在論に背を向けたということである。私自身が認めるより主流の見方を、アリストテレスは实在論の一切の商標と永遠に結託するものと見なししている。アリストテレス的実体の流れがどうであれ、人間精神の外側での实在の欠落は個体的実体の欠落ではない。グラントのアリストテレスに対する相対的な敵意は、彼の哲学一般の立場と同様、ジョルダノー・ブルーノにきわめて近い——彼は物体の哲学者というよりは自然の哲学者であり、物質と形式の双方を擁する無限な一者

の哲学者だからである¹⁷。

ハーマンの専門家である飯盛元章氏によると、ハーマンとはオブジェクト指向哲学を標榜しており、非関係的なオブジェクト同士を、魅惑を通じて「触れることなく触れさせなければならない」¹⁸という議論を構築する。こうした議論はライプニッツのモナド、および予定調和を連想させるものだが、グラントによればモナドであれオブジェクトであれ、それが先述のアリストテレス-カント的な物体主義に反対しているというのは明らかである。これに対してハーマンは、グラントの議論にしたがえば通常の物体同士の関係を論じることができなくなることを批判するのだが、私見によればグラントはハーマンが目指すような定常的な世界を論じるつもりは毛頭なく、むしろドゥルーズと結びつけて論じる超越論的火山活動が象徴するような、巨視的な視点で世界がダイナミックに展開する状況に興味があるので、両者の議論はすれ違っているように思える。

こうして見ると、グラントがシェリングの自然哲学から読み取った事物化されない自然という論点は、必ずしも他の思弁的實在論者たちと共有されていないように思える。グラントの場合こうした自然がまさしく「實在的」だとされるのだから、考えようによっては肝腎の「實在性」そのものについて、思弁的實在論者たちのあいだで合意が出来上がっていないとも受け取れる。そこで容易に推測されるのは、グラントの言う「事物化されない自然」が「新しい唯物論」と結びつかないかという着想だが、新旧いずれの唯物論もグラントの批判するアリストテレス-カント的な物体主義を前提していることになるだろう。そうなるとグラントの議論は、シェリングの自然哲学の読解としては魅力的ではあるものの、思弁的實在論と新しい唯物論の双方の議論にそぐわないものとして位置づけられることになるだろう。

最後に引用したアンソロジーのなかで、ハーマンはシェリングのプラトン解釈に基づいて議論を進めるグラントの提示する土俵に乗らずに、自らが一家言を有するブルーノについて論じ、同じアンソロジーの論文においてグラントもブルーノを解釈することに応じるわけだが、こうしたやり取りから見えるのは、サルトル以降現象学的な議論に終始してきたフランス現代思想が、思弁的實在論を機に伝統的な哲学者の議論の解釈を再開させてきたということである。思弁的實在論が今後どういう展開をするかということよりも、グラント以外の思弁的實在論者たちにより、伝統的な形而上学がどのように再解釈されるかを見守っていきたいと思う。

註

- ¹ 「ポスト・カント主義と相関主義——グラントを介して」シンポジウム「『實在論』の可能性をめぐる」東洋大学国際哲学研究センター、2016年11月12日。

- ² 清水高志「メイヤスーと思弁的实在論」『国際哲学研究』第6号、2017年、86～96頁。
- ³ 最近になってようやくはじめて論文が邦訳された（浅沼光樹訳「自然はあるがままにとどまるのか——力動性と先行性基準」『現代思想』1月号、2019年）。
- ⁴ この書名で和訳の作業が進行中だという情報を入手している。
- ⁵ F.W.J.Schelling, *Timaheus*.“(1794); hrsgb. von H.Buchner, Stuttgart 1994.
- ⁶ 以下プラトン、アリストテレスからの引用の邦訳は、グラントの英訳をもとにしたものである。
- ⁷ 八杉竜一『進化学序論——歴史と方法』岩波書店、1965年、161頁。
- ⁸ I.H.Grant, *Philosophies of Nature after Schelling*, London 2006, p.13.
- ⁹ *ibid.*, p.169-170.
- ¹⁰ ドゥルーズ（財津理訳）『差異と反復』、河出書房新社、1992年、344～345頁。
- ¹¹ F.W.J. Schelling, *Zeitschrift für speculative Physik*, Hamburg 2001. 101.
- ¹² *Schellings Werke*, hg.von.M.Schrörter, München 1927ff.この著作集からの引用はオリジナル版にしたがい、巻数と頁数は本文中に示す。
- ¹³ 山森裕毅『ジル・ドゥルーズ——超越論的経験論の生成と構造』人文書院、2013年、54頁。
- ¹⁴ A.Bowie; “Something old, something new……”, *Radical Philosophy* 128, 2004, p.47. もっともポワイが問題視するのは、『シェリング以後の自然哲学』より以前の次の論考である。I.H.Grant, ‘Philosophy become Genetic. ’The Physics of the World Soul, in: J.Norman, A.Welchman (ed.); *The New Schelling*, London 2004.
- ¹⁵ セットガスト（山本貴光・吉川浩満訳）『先史学者プラトン——紀元前一万年——五千年の神話と考古学』朝日出版社、2018年。
- ¹⁶ 浅沼光樹「シェリングと思弁的転回——グラントのシェリング主義について」『近世哲学研究』第20号、2017年、124～125頁。
- ¹⁷ G.Harman, ‘On the Undermining of Objects: Grant, Bruno, and Radical Philosophy’, L.Bryant, N.Srnicek and G.Harman (ed): *The Speculative Turn. Continental Materialism and Realism*, Melbourne 2011, p.27.
- ¹⁸ 飯盛元章「断絶の形而上学——グレアム・ハーマンのオブジェクト指向哲学における「断絶」と「魅惑」の概念について」『中央大学大学院研究年報』第46号、2017年、69頁。